

# ♪ プログラムノート ♪

音楽学者 岡田 暁生

## オペレッタとオペラは違う。

オペレッタはいわばオペラの庶民バージョンだ。ナンバーとナンバーはレチタティーヴォではなく、セリフでつながれる。だからスピーディーで芝居としても面白い。メロディーは親しみやすく、オーケストラは大きくない。そしてふんだんにお笑いの場面が入っている。オペレッタが生まれたのは19世紀中ごろ。20世紀のミュージカルもオペレッタが母体となった。ただしオペレッタはただの安上がりオペラというわけではない。当時は、オペラは上流階級向けの非常にお金のかかる娯楽だった。それに対してオペレッタは、庶民目線からの上流階級に対する風刺を生命とする。『天国と地獄』で有名なオッフェンバックは、フランスにおける風刺オペレッタの代表だった。『こうもり』にもまた<sup>や</sup><sup>ゆ</sup>擲揄のスピリットが満ちている。これは当時のウィーン・ブルジョワ社会のパロディーなのだ。

## ブルジョワ社会への風刺

形ばかりの金満家夫婦、パトロンをみつけて女優になりたがっている女中、退屈しのぎにパーティーばかりやっているロシア貴族。『こうもり』の登場人物たちは、みんな刺激を求めている。そんな金持ちたちの倦怠感を、ヨハン・シュトラウスは小股の切れ上がったワルツやポルカで<sup>わら</sup>唾う。一見曇り一つないとみえる『こうもり』であるが、実は散々な社会情勢の中で初演された。つまり初演の1874年とは、前年のウィーン万博が大恐慌およびコレラの流行と重なってしまい、大失敗に終わった直後だったのである。

『こうもり』の主人公はひどい目にあってもなお享樂的で利己的な生活をやめようとしない金満ブルジョワたち。中心は金持ちの銀行家アイゼンシュタイン、その妻ロザリンデ、そして彼らの友人で狂言回し役のファルケ博士（通称こうもり）のトライアングルだが、これはまさに1873年のウィーン株式大暴落に直撃されただろう社会階層なのだ。それでも彼らはめげずバカ騒ぎばかりやっている・・・。

## 1 幕と「どうにもならないことを忘れられる人は幸せ」

幕が開くとロザリンデの昔の恋人アルフレードがセレナーデを歌っている。ロザリンデの夫アイゼンシュタインが役人を殴り禁固刑を言い渡されたのをいいことに、旦那の拘禁中に再び彼女に言い寄ろうとしているのだ。ファルケがやってきて、今夜のパーティーにアイゼンシュタインを誘う。どうせ牢屋に入るなら、奥さんに内緒でバカ騒ぎをしようぜ、というわけだ。二人が小躍りしながら去ると、今度は女中のアデーレが「おばさんが病気なんです、今夜はお暇をください」と言いに来る。もちろんウソ。彼女もこっそり夜会に行こうとしている。かくしてロザリンデが一人になると、アルフレードがお屋敷に上がり込んでくる。「君は一人で寂しいだろう、今晚は僕が君の旦那になってあげよう」と厚かましいことこのうえなし。彼は「どうにもならないことを忘れられる人は幸せ」と歌う。いまさら状況を変えられないなら楽しむのだ。有閑マダムロザリンデもまんざらではなく、調子にのったアルフレードは旦那気取り。そこに刑務所長フランクがアイゼンシュタインを収監しに来る。アイゼンシュタインのガウンを着こんでくつろいでいるアルフレードは、身代わりとして牢屋へひたてられていく。どうしようもないときはジタバタしない——それが『こうもり』のモットーだ。

## 2 幕と仮面

ロシアの大金持ちオルロフスキー公爵の仮装パーティー。「女優オルガ」と名乗ってやってきた女中アデーレを見て、同じく「フランスのルナール侯爵」と名乗っているアイゼンシュタインは「うちの女中にそっくりだ!」と口走る。「なんて失敬な!」とアデーレのアリア。そこに「フランス人シュヴァリエ (騎士)・シャグラン」を名乗る刑務所長フランクもやってきて、アイゼンシュタインとの珍妙なやりとりになる。次にロザリンデもハンガリーの貴婦人に仮装して登場。アイゼンシュタインは妻だと気づきもせず口説き始める。だがロザリンデは逆に言葉巧みにアイゼンシュタインの時計を浮気の証拠としてとりあげてしまう。そこに人々がやってきて、「本当にハンガリー人なのか仮面をとって正体を見せてください」とせがむので、「では音楽で証明しましょう」とハンガリー風チャルダッシュを歌う。次はアイゼンシュタインによる暴露話。かつてパーティーで酔いつぶれたファルケをアイゼンシュタ

インが置き去りにしたところ、ファルケは仮面舞踏会のこうもりの衣装のまま帰宅する破目になり、以来「こうもり博士」という変なあだ名をつけられたのだった。やがて夜も更けてきて、締めくくりの舞踏会が始まる。パーティーの締めのシャンパンの歌の最中、朝6時の鐘が鳴って人々は去っていく。すべては仮面。素顔などどこにもないマスカレード。

### 3幕と懲りない人たち

舞台は刑務所。アイゼンシュタインの代わりに牢屋にぶち込まれたアルフレードは相変わらずセレナーデを歌い、看守フロッシュは朝から酔っくたを巻いている。刑務所長フランクがご機嫌でご帰還。ところが彼のことを「シュヴァリエ（騎士）・シャグラン」だと思い込んだアデーレが追いかけてきて、「わたしのパトロンになって」とせがむ。慌てたフランクはアデーレをとりあえず牢屋にぶち込む。そしてアイゼンシュタインも入牢のためにやってきて、フランクと思わぬ再会になるが、フランクが「もうアイゼンシュタイン氏は入っています」というのでややこしくなる。事実関係を確認めべくアイゼンシュタインはアルフレードの弁護士に変装。ロザリンデもやってきて珍妙な三者会談。事態を理解したアイゼンシュタインはキレて正体をあらわす。だがロザリンデは夜会で奪い取った時計を取り出して見せ、夫をぎゃふんと言わせる。そこにファルケ博士とオルロフスキー公爵ら、夜会のメンバーがぞろぞろ見物にくる。すべてはパーティーの余興としてファルケ博士が仕組んだことだった。アデーレはオルロフスキー公爵がパトロンとなって女優になることになり、最後は「シャンパンの歌」で幕となる。すべてはシャンパンのせいだったのだ。みんな懲りたりはしない。どうしようもないことは忘れ、酒と音楽に酔う——このウィーンの享楽主義が野村萬斎によってどう日本へと置き換えられるか、注目である。